

虹を呑む手のひら



森本湧水

目次

学校帰り、地面から手が生えていた。

人じゃない、とすぐに分かった。その手は毅然としてそこにあり、けっして無惨に痛めつけられた結果ではないのだった。美しい手だった。女性のように細い爪と、陽を浴びてできた褐色の皮を持っていた。私はただ、なんと美しい、と思った。

うちに帰って家族に手のことを話した。

「白樺の木の隣に住んで、じいさんに聴いてみな」

と言われた。

白樺の木のじいさんは、町で一番の物知り。物知りだけじゃなくて、便利屋だった。

大人たちは、地面から手が生えているのを迷惑がったのだ。わたしがどんなに美しい手だと伝えても、

“手は地面から生えたりしない”

そのことの方が大切だった。確かに大切なことは、今のわたしなら分かる。

私はともかく、物知りじいさんに、地面に手が生えている、と知らせに言った。

うーん。

じいさんは困ったような、拍子抜けたような、つまりぽかんとした顔をして。

「そりゃ、虹が必要だな」

と言った。

なぜ。

と聞いたら、

「それは、雲を吐く木の芽さ。そのうちするする延びて、雨をつくる種を吐く。だがな。水ばかり浴びせて育てると、ここいらに大雨を食らわすぞ。

虹をとってこんといけない」

そう言って、じいさんは家の奥になにか、道具を取りに行ってしまった。

私は、見に行ける時はいつも、地面の手を見に行った。晴れた日には指をすぼめ、夕暮れの紫の空に逢うときは必死で手のひらを向けるのだ。掴みとろうとするように。

拮据、虹は間に合わなかった。

ある日見に行ったら、手は肘まで延びたその根本から切り取られていた。虹が間に合えばよかったかもしれない。

知っている。

その手は、面倒くさがりの大人たちが、刈り取って捨てたんだと。

虹を呑む手のひら

著 森本湧水

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
